

『春と秋とソラの色 -Complete Book 2-』

著：朝丘 辰

ill：yoco

——大晦日の午後五時、約束どおり横浜のホテルへチェックイン。

「賢司さん、仕事本当に大丈夫だったの？」

「もちろん、なんにも心配いらないよ。……というか、楽しみにしてたホテルの部屋へ入って三分後にその質問はないなあ」

「……ごめん」

目の前にはガラス窓いっぱいひろがる横浜の夕景がある。横浜港とベイブリッジ、ゆったりすすむ船、群青から橙色へと色彩を変える空の鮮やかなグラデーション。

素敵……と見惚れたすぐあとに、こんな幸せな時間をくれる彼の苦労を思ってしまった。

「喜んでもらいたくて誘ってるんだから笑顔を見せてよ。……今年で四回目の年越しだよ」

「……うん。ありがとう、すごく嬉しい」

腰をひき寄せられて、目を覗きこむように彼が顔を至近距離へ近づけてきた。

三年前初めてキスをしたときとおなじ格好だ。額と額をあわせて彼が喉の奥で笑っていて、俺も笑って彼の腰に手をまわす。言葉もなにも必要なく、唇を重ねたのはおたがい同時だった。あのときはまだ高校二年の子どもだった。

三年経って、いまは大学二年生。賢司さんとの同棲生活も二年目になる。

「キスを拒絶した子とは思えないな」

「……それ毎年言う」

「そりゃ大事な思い出ですから」

「根に持ってるんじゃないくて？」

「おばか。可愛くてしかたなかったんだよ」

夜色に染まっていく横浜港を背景に、声を抑えて笑いながらキスを続けた。

賢司さんは必ず大晦日にホテルのスイートルームを予約して一緒に過ごすしてくれる。携帯ゲームやSNSを運営しているIT系会社の副社長で、いつも忙しくしているのに、この日だけは絶対俺にくれた。

それで、今年は四回目の年越しになる。

「一吹こそ毎年俺といて大丈夫？ 本当なら名古屋にいかなくちゃいけないでしょ」

たしかに、うちは名古屋に住んでいる母方の祖父母と年末年始を過ごすのが恒例だった。

「うん。心配しなくていいよ、大丈夫」

でも現在では家族全員が俺の事情を酌んでくれていて、年が明けたあとの冬休み中に挨拶へいくようになっていた。

ゲイなんて許されないと考えていたのに、いまは贅沢なほど幸せだ。

ストレートだった彼の人生の貴重な時間をもらっているぶん、俺はできる限り精いっぱいの愛情で、

幸せを返したい。どんなに努力しても、大人のこの人にはかなわないことのほうが多いけど。

「……もらってばかりでごめんね。今夜賢司さんにも喜んでもらえるように努力するから」

「なに？ 努力って。……オトナの話かな？」

「それも、それ以外も」

ははは、と眉をさげて嬉しそうに笑われた。

「何年経っても一吹は可愛すぎるな」

「真剣なんだよ」

「真剣になってくれるところが可愛いんでしょうが。あー……早速幸せで胸がいっぱいだ」

腰をきつく抱かれて唇をむさぼられた。俺はやっぱりこうやって、いたらないところを細部まで賢司さんに許されている、と思う。

「……一吹」

「ん」

「わかってる……？ 俺のほうが一吹を先に好きだったんだからね」

「……。嘘」

「いい加減信じなさいって。だから恋人になれただけでも幸せなんだよ」

何度説得されてもにわかには信じられない。そんな奇跡みたいなこと。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>